

読めるのに読まないイマドキの若者たちを考える学習会 報告

自由の森学園司書
埼玉県立浦和第一女子高等学校司書
慶應義塾大学非常勤講師
(進行 東京学芸大学附属世田谷中学校司書 村上恭子)

大江輝行氏
木下通子氏
汐崎順子氏

2月27日(土)13時から16時までの3時間、上記の学習会をオンラインで開催した。学習会は、東京学芸大学附属学校司書部会・学校図書館問題研究会東京支部・都立学校司書会の共催によるものだが、告知からほどなく100名の定員に達した。テーマへの関心の高さと、対談をお願いした二人のベテラン学校司書、埼玉県立浦和第一女子高等学校の木下通子さんと、自由の森学園の大江輝行さんという魅力的なお二人の話が聞けることが大きかったように思う。

第一部

～自己紹介から～

木下

小さい時から本に囲まれて育った。我が家は母子家庭で母が本に関係する仕事をしていたため、一人っ子の私は、母の持ってくる本に囲まれて大きくなった。小さい時の記憶には、『おさるのジョージ』や『ももいろのきりん』がある。母が持って帰ってきた本の感想を聞かれることも多く、母から頼られることが嬉しかった。それまでは子ども向けの文学は、外国文学の翻訳物が主流だったが、私が小学生の頃から日本の作家が創作児童文学を出すようになり、それを読みながら大きくなった。私にとって「読む」ことの根底は文学、物語だと言える。

司書になったのは、たまたまご縁があったからで、本当は国語の教師になろうと思っていた。私が司書になった当時は、高校の先輩司書たちと土曜授業の後に読書会などもやっていたが、どちらかといえば司書は図書館の管理にエネルギーを注いでいた。司書になって3年目に大江さんに会い、自由の森学園の図書館に圧倒された。自森(注:自由の森学園のこと)の活動には愛がある。今日は大江さんの話をとても楽しみにしている。

現在は、進学校でとても読める子たちと関わっている。自分には子どもが3人いるが、上のふたりには幼い時は読み聞かせを頑張っていた。3番目になると、忙しくて読み聞かせを上の子に任せることも多かった。高校生になった3番目の子はほとんど本を読まないが、実は困っていない。読めるのに読まないから、そのうち読むようになるだろうと思っている。

大江(自由の森学園と図書館をスライドで紹介)

自由の森学園は埼玉県西部、飯能市に位置する森の中、丘の上にある。「自森坂」と呼ばれる坂を登ると正面階段・正面玄関があり、その真上(2F)、中学棟と高校棟の真中に図書館がある。2020年4月から図書館の通称が新たに付けられた。館内を生徒の作ったコウノトリのオブジェが飛翔する(笑)「JYAL」(じゃる)＝「自由の森学園(J)Y.A.図書館(Library)」。蔵書冊数 50,000 冊、一人あたりの年間貸出冊数は、中学生 36.8 冊、高校生 28.2 冊。貸出冊数の制限はなく期間は2週間。ただしコミックは2冊2日間で、ちなみに、今挙げた年間貸出冊数にコミックは含まれていない。

中学は総合的な学習の時間、高校は選択講座が多いのが特色(例えば「サンバ」から、私が図書館で開講している「図書館を考える」「Y.A.ブックス研究」まで)。蔵書もそれを反映して多彩である。総合学習とは体験学習であり、農業・林業、地域研究、沖縄(修学旅行)等がある。体験学習では、事前に図書館で調べ、実際に現場・現地に行き、目からうろこの体験をする。その体験をもとに、図書館でさらに調べてレポートに仕上げるというサイクルがある。沖縄関連の本(「うちなー・らいふ」コーナー)は、地域内で一番資料が充実している。

高校の100を超える選択講座は1コマ90分単位で構成。生徒同士が論議し合う時間も入れると90分は必

要。クラブの種類も多い。進路に関しては、仕事やプロフェッショナルに出会う一日というのがあって、生徒は自分でアポをとって会いに行く。インタビューをしたものをまとめて記録を図書館に収めているグループもある。そのほか、卒業生が卒業後の軌跡を語るフリーペーパーが、季刊『もりのあと』という名で発行されている。卒業生が書いた本、何らかのかかわりがあった本、300点以上を集めた「卒業生の本」コーナーもある。

以上、自己紹介代わりに、勤務する学校と学校図書館について語った。続く第二部で「本」と「読書」について集中して話したい。

汐崎

今回は、何をもって「読書」というのか、特に中高生の読書について話をしたい。私自身は、子どもの読書について研究しているが、慶應の幼稚舎の図書室に勤務し、公共図書館での勤務経験もある。現在は司書と司書教諭課程をとる大学生を相手に教えている。

～本題～

木下

●図書館のこと、活動のこと

埼玉県为学校司書に採用されたのは1985年。最初に勤務したのは商業高校で、浦和一女には、2018年4月に担当部長兼主任司書として着任した。埼玉県高校図書館フェスティバル実行委員長、ビブリオバトル普及委員、コグトレ研究会会員としても活動し、子どもの居場所ネットワーク埼玉にもかかわっている

浦和一女の図書館(2019年度)は蔵書約57,000冊(内多読用英語図書10,000冊)で、年間購入冊数約1,500冊。年間貸出総数は44,259冊で、1人当たりの貸出冊数は36.9冊。貸出冊数が多いのは、英語科が多読を推奨し、国語科による新書レポート課題が必須なため。3年前に赴任した当時、図書館は「学習室」で、司書は貸出と返却に追われていた。それを3年かけて、図書館としての機能を充実させていった。今は読みたい本の相談やレファレンスも増えてきた。クラウド上の検索サービスも導入した。去年の今頃館内に検索コーナーをつくり、ノートパソコンを設置している。多読のコーナーは生徒の話を聞きながら3年かけてレイアウト変更をした。貸出は基本的に生徒のセルフサービス。貸出は少ない日でも150冊、普通で4~500冊、多い時は何千冊にもなる。返却はBOXに入れてもらっている。

今年度は、Google クラウドで図書館ルームを作成し、現在は週2回程度発信している。小説のコーナーは本屋さんのような棚にしたいと思って著者順に並べ、見出しを入れた。コロナ禍でICT化が進み、蔵書検索にライブファインダークラウドを導入し、生徒が自分の貸出履歴を見ることができて便利になった。あわせて電子書籍サービス(ライブラリエ)を2021年2月1日より導入し、さいたま市の電子図書館サービスやカーリルなどをあわせて紹介している。電子書籍は30万円ぐらいで選書した。電子書籍の収集方針ははっきりさせた方が良いと思っていて、当面は英語の多読と新書、ガイドブックなど更新が必要なものを購入する方針とした。データベースに関しては、ジャパンレッジ・スクールは県立高校では導入は難しい。「朝日けんさくくん」は自宅から個別アクセスができるようになったので、検討中。国会図書館サーチ、CiNii. 学術情報データベースも生徒が使えるように案内した。メールでのリクエストを受付けられるようにした。「こうとけんさく」を使って他館からも資料が借りられる。授業との連携では、多読プログラムのサポート、新書の点検読書のためのリストアップ、探究学習における情報検索サポートなどを行っている。読む力をつけることと調べる力をつけることが学校図書館、私の役割だと思っている。

●生徒への読書アンケートの紹介(2020年の読書週間に実施・回答数220)

【この一カ月に読んだ本の冊数(英語の多読本と雑誌を除く)]…1冊 37.3%、2冊 20.5%、1冊も読まなかった人は16%くらいいた。

【その本をどこで手にいれたか]…学校図書館が最も多いが(6割)、家にある本を読んだと答えた生徒も多かった。これはそれだけ買って読んでいる家庭だということだし、お母さんと一緒に共有して読んでいるという人も

多かった。

【読んだ本の種類は】…読みやすい文庫が多い。

【読みたい本の種類は】…ジャンルとしてはエンタメ小説がすごく多く、ラノベは小学校高学年で卒業したと言う生徒が多かった。ちょっと書きたい、将来小説を書きたいという人、もっと骨太のものを読みたいという人もいるけれど、やっぱりエンタメ小説で息抜きに本を読みたいという生徒が多い。小学校の時は沢山読み聞かせをしてもらったが、中学校で読む時間がなかったという生徒が多い。

【好きな作家は】…東野圭吾(1位)、湊かなえ(2位)、住野よるが3位。ローリング(ハリーポッター)の人気も根強い(6位)

【(図書館に)電子書籍が導入されたら利用するか】…利用してみたいという声が半数近くあった。

●生徒とのかかわり方、読める子と読めない子

学校では、ジェンダーについても学び、上野千鶴子氏や安田菜津紀氏を講師として呼んで講演会をおこなっている。探究学習では、事前学習は熱心に行うが、終わったあとのケアができていないことが課題。昨夜、上野千鶴子氏と生徒との Zoom での読書会があったが、そこでフェミニズムについての情報をツイフェミ(Twitter 上でフェミニズム的な言動を展開する人々またはその現象)で収集している、という生徒に対し、「たった 140 字で何がわかるの? 今までジェンダーについて発言してきた人の話は本の中にあるのになぜその本を読まないの?」と上野さんに言われ、その生徒はハッとしていた。私も今までなぜそういうことが言えなかったのだろうと衝撃を受けた。

本校の生徒のように、読める力はあるのに読まない子たちには、その子たちの心をくすぐるような情報提供をすごく頻繁にしていってほしい。打てば響く生徒には打って打って打っていけばよい。「読まないようにみえるけれど、思うように読めないから読まない子も多い。そういう子にはどうすればいいのか」という質問があったが、読むことに関しては一人ひとりに寄り添い、サービスをしていくことが大事だ。ただ読書はスポーツと似ていて、ある程度読めるようになるために数をこなす必要があると思う。「読める」の定義も違う。教科書が読めることと物語を読めることは絶対違う。うちの末っ子は「教科書は楽しむためではなく、(良い)点数を取るために読んでいる」、「先生に解説されないと自分で読み解く気持ちにならない」、「今の自分には必要性がない、読むような気持ちにならないけれど、そういう気持ちになったら読むだろう」という。この子に関しては読まないことをあまり心配していない。小さい頃から読んできているから。きっと「読みたい」、「読むのが必要だ」と思ったらこの子は読めるようになるだろうと思う。でもこの子とは違って今後、読むことに出会えない子どもがもっと増えてしまうのではないかと危惧している。そういう子どもたちを支えていくのが学校図書館の仕事で、まさに小学校の学校図書館が大切だ。

村上

一女の生徒はいろいろなことをやっていくことで響く生徒たちだが、木下さんが着任するまでは読まなかった。それが読めるようになった。「読めるのに読まなかった子たち」に対して学校司書が色々なことをやったということにも注目したい。一方でそもそも読めるはずなのに、その力を育てていない…たとえば小学校の大切さについては第二部で話を聞きたい。

大江

●「本」とは、「読書」とは

今日のテーマ、「読めるのに読まない」とあるが、そもそも本をどう捉えるのか。竹内愨先生は、その著『生きるための図書館』(岩波新書)の第6章で、「音声、映像の記録も今はカギカッコつきの「本」と呼びたい」と書いている。私もこの「読める、読めない」という話題の時、こういうもの(音声や映像の記録)そして電子媒体もカギカッコつきの「本」と捉えて良いのではないかと考えている。「読む」とはどういうことなのか、についても、「今後は、それぞれの「本」の長所を組み合わせ、内容の理解を進める」と。それが、これからの「読む」もしくは「読書」といえるのではないか。さまざまな「本」を上手に組み合わせ、そこから自分の中にあるテーマを追いかけて、内容理解を

深めていくことが、「読む」もしくは「読書」ということではないかと私も思う。「本」と「読書」を、そのように捉えて、これからの話をしたい。

●生徒のアンケートの紹介(2021年1月に実施、回答数270)

ここからは、生徒と話し合っただけのアンケート「今、読書をめぐって」から見える高校生の実態について紹介する。生徒の側から「読書をめぐって考えるときにはどんなことを聞いてみたらいいのかわかるのか」を教えてください。

【(コミック以外の)本を読むのが好き?】… 55% ふつう 5% *生徒はコミックも「本」と捉えている

【どういうジャンルが好き?】…長編 15% 短編 75%(「ファンタジー」や「SF」より、まず「長編、短編」というカテゴリーの返事がまず挙がる。量の問題は私たちが考えているより、生徒は意識している)次に、ファンタジー、SF…と続く

【コミックを読むのは好き?】…好き 88% *コミックはアニメ原作として読んでいる、アニメが先行する

【ハマった・ハマっているコミックは?】…「呪術廻戦」(芥見下々著、集英社ジャンプコミックス)が人気。ダークファンタジーバトル漫画。

【コミックは紙で読む?電子版で読む?】…電子版が多い *コミックは電子版を「無料で読む」という感覚

【コミック以外の本は紙で読む?電子版で読む?】…紙(本は「有料」という感覚を持っている。お金の問題はかなりシビアなのが分かった。「気軽に読みたい本が図書館にあるのか」というのも大きな課題。コミックは無料、本は有料という捉え方が、「本は手に取りにくい」という感情を生んでいる一端としてあるのかも知れない)

【アニメを見るのは好き?】…好き 97% 『鬼滅の刃』『呪術廻戦』。その他『約束のネバーランド』『進撃の巨人』『NARUTO -ナルト-』など。*ジブリ映画は彼らにとって「名作古典」扱い、別格

【YouTubeは見る?】…ほぼ全員が毎日見ている。短い人でも20分~30分。平均2時間前後「No YouTube, No High School Life.: ユーチューブなしでは高校生活はない!」という感覚。小中でゲーム機やスマホを手にしたときから彼らのYouTube生活が始まっている

【好きなYouTubeの動画は?】…アニメーション付きのMV(「夜に駆ける」YOASOBI「うっせえわ」Ado)、THE FIRST TAKE、ライブトーク、Vtuber(バーチャルチューバー)、「花子さんが寝る前に」、「たっくーtv」、料理の番組(食べる、作る)、ヘアメイク、イラスト添削講座、ダンス、バレエ、「大変な途中下車」シリーズ、モノづくり面白いよ《くらひと》、一番多かったのが「ゲーム実況」動画 *参考図書:『どうぞ愛をお叫びください』武田綾乃、新潮社(2020/6)

*アンケート集計を見ながら「読書をめぐる座談会」での生徒の声…(リアルとZoomで座談会を開いて彼らの意見を聞いた)

→「最近のYouTubeは多種多様。とことん実用的なものからとことん無駄なものまでupされ続けている。動画を快適に視聴する環境もある。視聴するための機能も豊富になってきている。見たいシーンを秒数単位のところまですぐに飛べる。再生速度画質も選べる。字幕もつけられる。スマホを持っているのが当たり前なので、自分の部屋の本棚よりも情報の入手速度が速い。一人ひとりの要望(細かいニーズに)に、応えてくれる」「現代において情報を得たり、自分の好き嫌いを掘り下げるものが読書でなければいけない、という理由はない。好奇心や興味、学びを深めるものが読書である必要がないのでは? 選択肢が多様になった」

「現代ではあくまで情報源として出会ったのが、たまたま本であったり、テレビであったり、YouTubeやニコニコ動画であったりするだけ。選択肢が多様になった。読書にはYouTubeやネットニュース視聴ほどの存在感を与えられていない、手に取ってもらえる機会もあまり与えられていない感があることは否めないのでは?」

【SNSをやっている?】…LINE、Twitter、Instagramが主流。(noteが高校生の一部では流行っている。自分の書いた文章とか漫画、写真、音楽を投稿できる。創作メディアプラットフォームで有料販売もできる)

【読んでいる本で、フィクション系とノンフィクションの割合は?】…フィクション 85%

【物語系の本で、日本文学と海外文学の割合は?】…日本文学 90%、海外文学 10%

【次のアートで、いま関心があるのは?】…「音楽」が断トツに多い。洋楽、ボカロ、KPOP、JPOP、

YouTube の「歌ってみた動画」、次に、「映画」。(文学だと日本文学が9割なのに、映画だと洋画が多い、それも古いもの ジュラシックパーク、ジョーズ、ハリポタなど・アマゾンプライムなどで観ている。無料だからか?)

【今、日本の社会で気になっていることは?】…コロナ、エネルギー、中国問題、家庭問題(DV、ネグレクト)、フェイクニュース、携帯料金、オリンピック問題など

【そのニュースはどこから得る?】… SNS (YouTube、LINE、Twitter、Instagram)、TV、Yahoo、Google、次が人(親族、友人)、授業、最後に少数だが新聞

【課題レポートを書くとき、(必要などころの)本は読む?】…読む 65%。(基本はテーマに沿った主要本 1冊を通読、他に必要な個所だけ読む本を数冊(3冊前後)手に取るという)

【例えば、なんの授業(教科、講座)?】…①社会科 ②人間生活科(性・ジェンダー研究) ③理科(環境・生態学)④英語科(絵本の英訳が課題)など。

【以上の回答を思い浮かべながら、あなたにとって「読書」とは?】…

本を読んでいる集団…自分の世界を広げる、自分一人の世界により深く入る。自分の「好き」や「興味のあるもの」をより深く掘り下げることができる。新しい発見をする、知らない世界を知る、知識欲を満たすもの。心を落ち着かせる、活字を読むこと(「活字」は語り方、言い回し、レトリックを学ぶものとして書いている)。いろいろなどころにつなげる中心点、水脈的なものというイメージ

そんなに読んでいない集団…道楽、娯楽、楽しい、暇つぶし、現実からの一時避難、自分じゃないものに感情を働かせるもの。(道楽、娯楽、現実からの一時避難であるならば YouTube の方がはるかに無料で、手軽で、スピーディーということなんじゃないかと思う、とも。)あと「想像ですが」という但し書きがあって「退屈を埋めてくれて、刺激を与えられて、人生をハッピーエンドにしたいと思わせてくれるもの」という意見もあった。

没落系アトラクション!「ダイビング!!」←(あまり本を手にとらない生徒にとっての印象)

●私の問い・・・(大江さんから参加者に伝えてもらいたいものとして提示)

- 1.竹内先生の「本」の定義、「これからの読書」の定義を私は是とします。皆さんはいかがお考えになられますか。
- 2.従来の本について、「通読」以外の読み、「拾い読み」「拡散読み」も読むことであり、私は今特に「拾い読み」「拡散読み」が大切だと思います。皆さんはどのように考えられますか。
- 3.今、Y.A.にとって「読書」は単に読んで終わりではなく、そこから、書く、制作する、二次表現を生む…ことまでを含む行為としての「読書」と考えられます。皆さんはいかがお考えになられますか。
- 4.Y.A.のYouTube 視聴生活の中で、「従来の本を読む」という意味での「読書」の居場所は、どのあたりに開かれていくと、皆さんはお考えになられますか?

夕崎

●読書の深さ、読書の多様な形と幅の広さ、「読む楽しさ」を伝えるさまざまなアプローチは?

自分は小学生を主に見ていたため、中高生は私にとってブラックボックス。だからとても知りたいと思っている。今日の話の中では「ノーユーチューブ、ノーハイスクールライフ・・・」これも多くの若者はネットを見るときもはや動画(YT)しかみない、と聞いたことがあったので、なるほどと思った。

現在は読書の概念が広がっている。中高生がどのようにメディアをとらえてそこで自分の要求をどのように満たしているのかが生姿が見えた。これを「読書」として捉えたとするとまとめづらいが、木下さんの話からは本を中心とした読書の深さを、大江さんの話からは今の中高生の多様な読書の形、読書の幅の広さを感じた。読書については、「これを読むのが読書」、「これを読まなくてはならない」、「これが読書」という定義や決まりはない。われわれも発想の転換が必要。今日は二人の話には小学生の読書とその後(中学校～高校、そして大学生)についてどのようなロードマップがあるのかのヒントがある。読めるのに読めない・読めるような素地を小学生の時に作ってきたのに中高生では読まない子…こういう子には木下さんが言ったように、いろいろなツツキ方がある、そこから新しい読書興味が開けてくる。また中高生の彼らには沢山の選択肢を用意する・・・ということが大事だ。

一方で読めない、読みづらい中高生・小学生の時に読む素地をきちんと培うことが出来なかった、そういう経験に恵まれなかった子にはどういうアプローチをすればいいのか(小学校中学年くらいの読書が大切と思う)、どういう入り口を用意すればいいのか、読めない、読みづらい、読むことの楽しさを知らない子どもの読書への支援が大切になる。

休憩

第二部

～フリートーク&質問に答えて～

木下

●先生も、生徒も、司書も「読む」

休校中、オンラインのおかげで、授業見学のハードルが下がり、いろいろな先生の授業を見た。その際、図書館をどう活用してもらうのかの視点で見る。他校図書館での実践を参考に、会議室に先生用のブックトラック1台分の「先生文庫」的なものを置き、手続をしなくても手に取ることができるようにした。資料は常時入れ替えた。ここから、教員の貸出が増えた。現在は話題の本も生徒より先に貸すことで、お得感を感じてもらっている。生徒が拾い読みができるのは、ある程度読める力があるからで、その前提として通読する力、読み取る力が必要だ。そのためには物語を読めるようになってほしい。先生にも読んでもらいたい。小説などを私が先に読んで「面白かったんですよ」と貸すようにしている。「司書は子どもが読む本を読んだほうがいいか？」という質問について、私は読んだ方がいいと思っている。生徒と本で話ができることが大事だ。今の勤務校ではラノベは読む必要がないので、そうではない本が読める。文芸書など。でもラノベを読む子がいた前の学校ではやはりそれを読んで「そうだね」とわかって次の本につなげる。生徒と話せることが大切だった。

●何を・どのように情報発信しているか

情報発信ツールとしては、紙媒体で、新着図書案内(保護者や外部にも出しているので管理職の決裁が必要)を出している。表面には必ず1冊小説をとりあげ、自分で書評を書いているが、この記事はよく読まれている。現在は月1回配布している。

Google クラスルームの図書館ルームは中の人向けで、参加は任意。現在420名くらいが参加している。休校中が200名くらいだったのでだいぶ増えた。「ここにお得な情報があるよ」という感じで広まっている。お得な情報を出さなくてはならないので、いつも探している。クラスルームは学校内の活動であることから一任されていて管理職の決裁はいらない。図書館のホームページは外の人に向けた学校の活動報告と位置付け、管理職の決裁が必要。外向け、内向けを使い分けている。「これを買わなくちゃ、損だよ」、「お買い得だよ」というようなアプローチは特にうちの生徒には効果的だ。どこを打てば響くのかを考える。生徒が得だなと思うこと、ちょっとだけ勉強みたいなこともGoogle クラスルームに書くようにしている。

●「人」の大切さ、司書の仕事とは

本を読むことを面倒だと思っている生徒には、「面倒くさい」のハードルを下げるために、根気強くすすめる。大変だけれどそこはやはり「人」だと思う。人は、必要に迫られたら使うようになる。必要性や、自分にとっていいことだとわかることが大事。その部分について生徒間の格差が大きい。生徒のニーズに対応した情報発信をする。今の学校では、進学、勉強に対するモチベーションがとても高く学校でもそういう面をあおる。自分はそういうアプローチは嫌だなと思っていたけれど、今までの方法だと彼女たちに響かない、ということが分かった。それぞれに対応することが大切で、他の学校だったらまた違うアプローチがある。昔より今は、「知っている」、「知らない」ということの格差がとても大きいし、知らないことについて誰かが親切に手を差し伸べてくれるということにはならない。格差を縮める努力を学校がもっていかなくてはならないと思っているし、それが出来るのは学校図書館しかないと思

っている。司書が生徒の様子、学校の様子を分かっているわけではない。学ばないと生徒に合わせたサービスは絶対できない。司書はすごく重要な仕事をしている。司書自身が意識を高く持ってほしい。

大江

●時間をかけてゆっくり待つ、「個」として生徒をみる

自森の図書館の一番の特色は、広報 イベント アンケート ディスプレイ 展示 生徒自身が座る椅子とか長椅子、蔵書の構成のありかたそのものも、生徒の参加で生徒と共に、成長とともに作ることが、生徒の読書を促進するサポートになっている。生徒の動きと表情と声で図書館を作っていく。自分は「待ち」、「受け手」の人。時間に拘泥されない。自森では、目の前の生徒を中1から高3までの6年間で見るができる。その待ちの時間がある。生徒の育ち方に合わせながらゆっくりと学校図書館からのサポートをする。「ゆっくり待っていいんだ」という環境があるのが自森。「受け」と「待ち」があつての「声かけ」。それには、一人ひとりの生徒を良く見ること。教員は、基本は個だが、グループ単位の生徒への働きかけが多い。司書は個々の生徒のそれぞれの成長に合わせた働きかけをするのが大事。また、生徒と一緒に作ることで、その子に必要なことへの働きかけが、より、センシブルにできるのではないかと。そういう働きかけが学校の中で認められている。

●一緒に取り組み、作っていく

教員は「教える」という側面から課題を提示し、そこから生徒を評価する。司書はむしろ、育てていく生徒と一緒に活動することで育ち合いながら見えることがある。それは、自森の場合、複数の司書がいるから物理的にも可能なことであるけれど、中学生と一緒に農業体験をするなかで、農業の棚や、その隣の棚に何があると学びが広がるか、生徒の視点・発想・理解の仕方から図書館の蔵書を作っていく。そうやって生徒と一緒に活動をし、彼らの様子を見ること、彼らにとって何が今まさにどのような本が必要かを知るという作業ができる。そのようにして選ばれた本や蔵書がより近しく生徒に語りだす。

例：総合的な学習の農業体験からの書棚づくり～農業に関する本の棚+田んぼでみられる生き物の発見・感動から興味・関心・好奇心の発動～もっと大きな生き物の棚を広げる。また、学校のすぐそばに田んぼがあることから、地域についての棚ができる。そうやって書架が右に左に広がって大きな塊になる。→「地域」、実際の「農業」、「生き物(大小)」という広がりを持った書棚 そういう蔵書の構成ができあがっていく。

自森では、教員と司書、お互いに尊敬できるような立場、関係性、同僚性(パートナーシップ)がある。自森は教科書があつて授業をする学校ではない。教員は授業を独自に作っていくために、様々な資料が必要。そのためのネットワークが広がる。授業に協力する、教員を支援することで司書の仕事も広がり、自らを磨いていくこともできる。学校で人と人とのつながりができていくなかで、図書館の本が、学校の様々な場所に置かれ、図書館が拡散し、言わば「分室棚」のようなものができてくる。そうなれば、学校図書館は学校の中の「中央図書館」というイメージとなる。その中でより子どもに近づいていく。こういうことはゆっくりと時間がかかることかもしれないが、やりがいがある。

村上

●先生の活動、生徒の学びとともに作る図書館を

私たちは理想を言えばそういうやり方をしたい。先生の活動や生徒の学びと一緒に図書館を作っていきたいと思っている。そうやっていければ学校図書館の蔵書が豊かになり、司書も鍛えられる。子どもたちは学びが楽しくなり、先生たちはサポートが得られ、よりよい授業ができるようになる。すごく WINWIN の形になれるはずだと思っていたが、そういう関わり方がなかなかできない。

そういう「自分の有用感」を感じられるような仕事をしたいと思っている人は多くいるはずだ。でも学校司書の多くが限られた時間で学校にいる。授業に関わることがなかなか難しい。想像の中で資料を提供するということが多い。もっと理解が進めばもっと変わっていけるはずなのに。今は変わり目なのかもしれない。

●「読書」、「本」をどうとらえるか

学校図書館の蔵書への価値観が変わっているのが今。ネットを入り口に紙の本を読もうよ、という傾向もある。ネットの情報はどこにあるの?といったときにそれは本につながっている。もともとネットの情報は本にあるということを生徒に伝える。あらゆる読書を本につなげる必要はないし、高校生であればなおさら本にこだわる必要はない。あらゆるメディアが入り口、という可能性を考えるべきだが、そこでもう一歩考えれば小学生はどうなんだろうと、それは今日の参加者の共通の疑問だと思う。さらに赤ちゃんへの電子書籍はどうなんだろうとか。

●読めない「中学生」へのアプローチ(大江さんへの質問より)

村上: 自森に入学する子ども(中学生)はいろいろな小学校からくる。中一の段階で「本を読まない」「本の面白さが分かっていない、読めない」子はいらぬのか? その子たちは本に対するハードルは下がっていくのか。自分で読めるようになるには、小学校の中学年が大切ではないかと思うが、その時期に読書の楽しさを知ることが出来なかった子どもたちも、手遅れではないということか?

大江: 自森に入学する中学生の中には本に親しんでいない子もいる。もちろん、中学年で読書の楽しさを知っていることは大切だが、それが出来なくても全然手遅れでないと思う。とにかく、私は、中学1年生は遊ばせてあげたいと思っている。沢山遊んで遊びまくる。それが大切。入学式では中3中2が企画して新中1を迎え、式当日、式後に鬼ごっこ、ドロ警をやる。誘い合って思いきって遊ぶところから自森ライフが始まる。

彼らはよく遊ぶ。遊ぶことにより、他人との様々な関係が生まれてくる。やがて、他者との関係の中で、言葉の大切さ・必要性をあらためて内から感じる時がくる。それは、遊びの中で関係づくり(コミュニケーション)に悩んだり、そもそも遊びに入れず疎外感を抱く生徒にとっては、なおさら。そのとき、彼らを見守り、彼らの話によく耳を傾け、ほぼ(笑)ジャストミートに、ほぼ(笑)適切な本の提供ができる人がいれば、そこに本との素敵な出会いが生まれる。「図書館に行って司書の人に話してみれば」と言ってくれる教職員や管理職がいれば、なおいっそう。子どもたちの求める度合いにより、読書の楽しみやなぐさめ・深みは様々なグラデーションを描く。彼らが活字を読めて、そこに彼らの関心や好奇心を肯定し促す、促し肯定する環境があり、それを面白がる「図書館の人」がいて、その人(たち)による日々の(忍耐を伴う)柔軟な働きかけがあれば、まず手遅れということはない。

木下

●「子どものために何ができるか」を忘れないこと、へこたれないで頑張ること、固定観念にしばられないこと

よく「木下さんだから、大江さんだから、一女だからできる」と言われるが、私は大江さんや他の方の実践を見て、自分だったら何を取り入れられるかをいつも考えてきた。とにかく、へこたれないでついていく。やる事が多くてどうやって優先順位をつけたらいいかという質問があったが、子どもたちのために何をしたらいいか そのための情報収集をしていることを忘れなければ、おのずとやるべきことは見えてくる。そこが抜けてしまうと、自分のことではいっばいっばいになってしまっって優先順位がつけられなくなるのでは。

もう一つ、昨日の上野さんの話でショックだったのが「ステレオタイプ」という言葉。私たちは固定観念、価値観にとらわれている。上野さんは生徒の言ったことに「あなたの考え方に共感します」といった。実はそういうことが出来るのが学校司書だ。一人ひとりに向き合うことができるのが司書だと思う。今、埼玉の司書は高学歴になってきて、生徒のことを理解できなくなっている面もある。たとえば読めない子のこと、読まない子のことが理解できない、分からなくて「どうして読めないんだろう、読まないんだろう」とだけ思ってしまうことがあるかもしれない。そういうステレオタイプではだめでは? もっと外を見て、いろんな刺激を受ける必要があるのでは。私たちは(決めつけてしまうのではなく)いろいろなところに出て行って刺激を受けて考えることが大切だと思う。

～埼玉県立飯能高校司書の湯川康宏さんに発言を依頼～

*湯川さんは公共図書館の経験を経て希望して学校図書館(学校司書は5年目)に異動し、ユニークな図書館づくり(すみっコ図書館)を実践。事前のメールでのやり取りで、「うちの子(生徒)は、読めないから読まない、

スマホは読めるのに本は読まないのはなぜかを聞きたい」との意見があった。

湯川

●最初から本でなくてもいい、本にたどり着くスピードは一人ひとり違う

異動した時、学校図書館では公共図書館の常識が通用しないことに驚いた。でもそれが正しい感覚だと思う。他の図書館をみていないし、学校図書館の人は「自分の学校が一番」と思っている。図書館は本があるところ、という一般的なイメージが正しいように思われているが、私はそれが嫌だった。情報を扱うのが司書の仕事なら、本にこだわらなくていい。2021年版のYA総目録に「本が主役じゃない図書館」という内容で文章を書いた。本、本とこだわりすぎるから逆に生徒は本が嫌いになるのではないか。本を手取る前のハードルは実は何段もあって本に行き着くのは最後のゴール、それこそ生徒たちが卒業してからでもいい。高校生活の3年間ではなく、とにかく始めてみよう。いきなり本から入らなくてもいいと思っている。今までずっと本を読んでこなかったのに、いきなりは読めない。本を読むことを自転車に乗ることにたとえるなら、いきなり自転車に乗れと言われているようなものだ。自転車で走るとこんな景色なんだよとか、自転車に乗る前にどんなことを伝えれば興味を持ってもらえるのかを考えることが大切。自転車に乗れる子はそのまま乗って素敵な景色を見ながら走ればいいが、そうではなくて入ってきた子たちは、車やバスで行けばいいじゃない、なぜいきなり自転車に乗って難しいところを通って痛い思いをしなければならないのかって思っている。彼らにとっての Youtube は車みたいなもの。それを対等な土俵にいるように闘うのは無理なので、いろんなもの(本でないもの)が入り口でいい。最終的に本にたどり着けばいい。どんな道を通っても、図書館が好きになって、図書館に来てくれたらいい。(図書館にたどりつくには長い道のりがある子もいる)、そのなかに本がある。本にたどり着くスピードは一人一人違う。司書は皆工夫して努力をしているわけだが、私はちょっと変わったやり方、目的じゃないものを買わせてしまうみたいな商法、「ホンキホーテ」というイメージで図書館づくりをしている。(ホンキホーテ→図書館には本が目的できたわけではないけれど、本を買わせちゃうというアプローチ)

～杉並区の小学校司書 大澤倫子さんに小学校中学年の子どもたちの様子について発言を依頼～

大澤

●読めるのに「本が好きでない」という子ども、集団で育つ・ライブ感と小学生

以前、低学年でたくさん本を読んでいて感想もしっかり書ける子がいたのだが、実は本が嫌いと思った時は衝撃を受けた。どんどん読めるのであれば、当然本が好きだろうと思っていたのに、そうでない子が出現した。好きになってほしいなあと思いながら接していたのだが、学年が上がるにつれて読むのが好きに変わっていった。小学校は個への働きかけはもちろんだが、集団で育っていくという部分がすごくあり、それはライブ感ではないかと、今日お二人の話聞き思った。Youtubeとか電子メディアはライブではないメディア。小学校の低学年・中学年では、みんなで一緒に聞くとか、みんなで一緒に読むことで子供が育っていく。おはなしを聞いて、隣の子が息を飲むとか、大笑いするとか、終わったあとでみんなが良かったなあとなんとなく流れる雰囲気とか、空気感を一緒に体感することが、本が好きや楽しいにつながるのではないか。家庭に本がない子が増えているし、本があっても読んでももらえない子もいる。先生や司書と子供という生身の人と本の付き合い、そういうライブ感があることが、その後の本を読む読まないにすごく関係している気がする。

悩ましいのは、小2～小4ぐらいを対象とした新しい文学で、魅力的な本が少ないこと。ノンフィクション系のもは面白いものがいっぱい出てきている。3年生で絵本から雑学系の本に流れる子、5、6年生が読むようなショートショート系(短い話が集まってる本)に流れていく子が沢山いて、一足飛びだなあと思う。そこを埋めるようなちょっと長い物語、読んでよかった(面白かった)と思える本を手渡していきたいし、そういう本が沢山出版されるといい。また、ビブリオバトルを重ねて、子供たち同士で勝手に本の交流が生まれて、本好きな子供が多くなったクラスもあった。小学校では、長いスパンの働きかけも大事だと思う。

～3人から一言ずつ～

木下

読める、読めない、どういう本が読めてえらいではなくて、読む力、読む本の好みは一人ひとり違う。教科書を読むわけではない。それぞれに寄り添うのが学校図書館の役割。一人ひとりの子の読む力、読む幅をひろげてあげるのが学校図書館。われわれはもっと考えて動く必要を、あらためて感じた。

大江

最後に子どもの声を紹介したい(読書座談会の後、そこで話されたものを生徒が活字にして渡してくれたものから)。男子の言葉:「僕たち10代はYouTubeやSNSで浴びるようにライトな情報に触れがちだ。動画をサクッと見る。また次に見たい動画をタップする。そんなとき自分の選択や時間の質もライトになっている。しっかりとした重みがなく、どんどん見れてしまうので、自分の好奇心に対してそれは実は積極的に向き合えなくなっているのではないかと思う。ライトに手に入るものはとても積極的にアタックしているように見えて、本人の中では実は積極的なものではない。一方読書は自分の興味や内心想っていることに向き合い、これだと決めてやっとな棚から本を取り出して始めることができる行為だと思う。その重さがその時間のかかりかたが、自分のなかに積極性というものを生んでいくと思う。そういった重みを持った選択を通して向き合うものに、ぼくらは積極的につきあっていけるのではないかと思う。」

YouTube世代に、動画視聴生活の中に「読書」の居場所はどこにあるのか?(一例として)それは、学校の中の図書館として、学校の中で行われる授業への支援のありかたにかかっているのではないかと思う。課題のために本を読む、それは読書と言えるのか、という問いについて、ある女子の言葉:「資料(本ではなく)として手に取るのがスタートだと思うけれども、自分の興味関心と向き合うチャンスでもあるし、私はこれを読書と考えたい。たとえ、読まざるを得なくて読んでいる本だとしても、自分のアンテナにかならずひっかかるものがある。それをいつも自分として見出していこうと思っている。自ら選び自分にひきつけながら行う読書はどこか奥深くに眠る新たな興味や関心を掘り下げていくようで面白い。」

汐崎

読書については自分のなかでわかったつもりでいたが、何を読むことが読書なのかというところから、実は行き詰っていた。メディアの多様化の中で、何が読書か、読めないとはどういうことなのか、疑問がすごくあり、もちろん正解はないが、思い込みで考えてはいけなそうと思っている。今日のお二人のお話から、読むことの幅広さ、深さや、読む人とか読む本とか読み方というのが、見えてきた。社会のなかのたくさんの要素を、それはバーチャルなものであったり、リアルなものであったり、電子書籍であったり、音楽であったりと、それらを読書に結びつけられる要素として考えている。でもやはり、お二人は着地点もすごく見つめていらっしゃるような気がする。(子どもたちにとっての読書、本に触れることの大切さを伝えていきたい)学校図書館にいる人の気持ちの持ちよう、子どもたちとの世界が違って来る。子ども時代は体験することが大切で、それを与える場が学校図書館であり学校司書なのではないか。(学校は好む、好まざるは別として子どもがかなりの時間を過ごす場所)

子どもの読書を考えるとき(大人の読書とは違って)そこに本があるだけでなく、つなぐ行為と人が必要、とても重要だと思う。今それを一生懸命考えていることが大切だ。それを考えるヒントをもらえた。今日聞いている人もたくさんの勇気をもらえたと思う。

今、バーチャルな世界で遊ぶことが多い中でも、子ども時代に体を動かして、対面の肉体的な経験をもって遊ぶことが大切なのではないか。それをなし得る一つが(紙での)読書であり、場所が図書館なのではないかと思ったりしている。

注)この資料の著作権は、発言者全員とこの学習会の主催者にあります。個人使用以外にお使いになる場合は、下記のアドレスまでご一報ください。 schoolib@u-gakugei.ac.jp (東京学芸大学附属学校司書部会アドレス)